



23

12.20

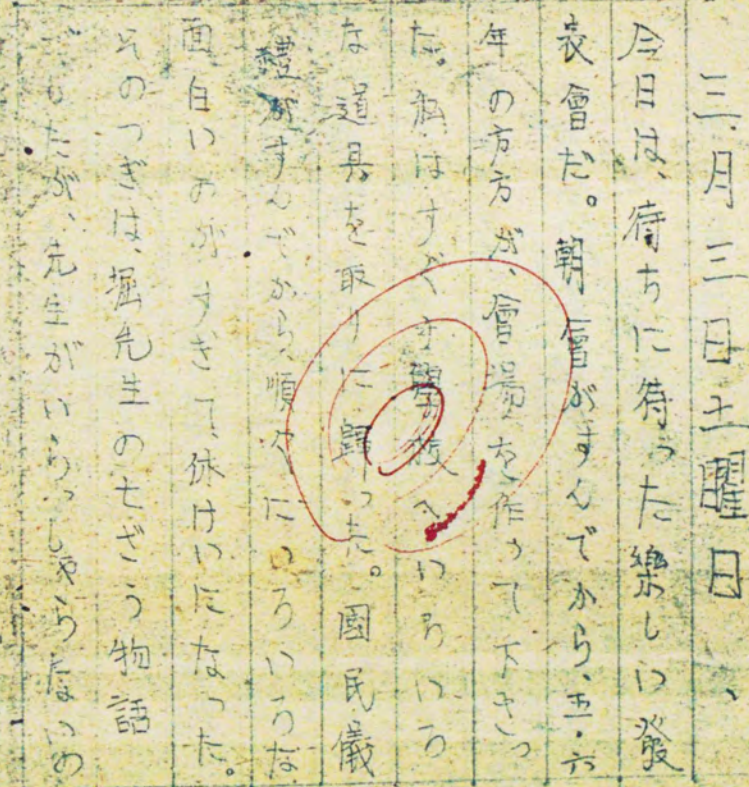
3.3

4.3



21





三月三日壬辰日

今日は、待ちに待った、楽しに發

夜會た。朝會がすんでから、五・六

年の方方が、會場を作つて下さつ

た。私はずいぶん  
勉強を怠  
り、い  
ろ

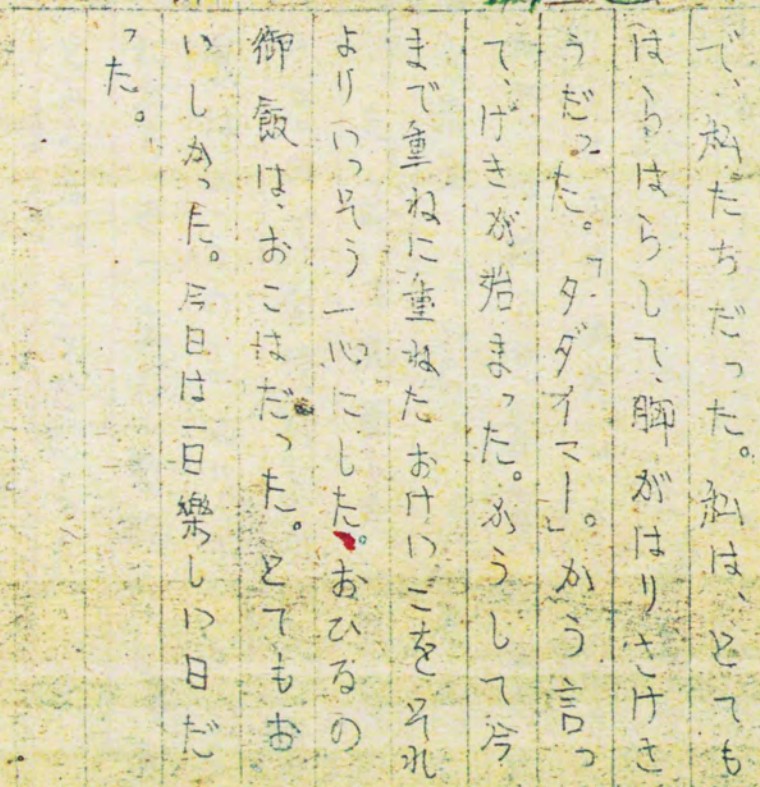
な道具を取りに歸つた。國民儀

禮がすんでから順々にいゝな

面白くおすきで休けいになった。

そのつぎは、堀先生の七ざう物語

したが、先生がいらっしやうなつめ



で、船たちだった。船は、とても

はらはらして、脚がはりさけさ

うだつた。「ダイヤモンド」。かう言つ

て、けきが殆まった。ふうして今

まで重ねに重ねたおけに二を只水

よりいつまでも一心にした。おひるの

御飯は、おこはだった。とてもお

いしゐた。今日は一日楽しい日だ

た



三月四日 日曜日  
 今日は三年生の面會日だ。まだ起  
 床の前だ。きつと三年生はきつと喜ん  
 ぶあることだらう。などといろいろと  
 考へてゐると、「ホー」。船のいやない  
 やな警戒警報のサイレンだ。又あ  
 のどま物のお客様がいやんなつち  
 ゃう。きつと三年生はつまらなかつ  
 てるだらうと思つた。  
 「起床。有賀先生がおしやつた。」



そりから少しして、「ドーン」ドーン  
 ン。と太こがなつた。間もなく  
 したくが出来た。ごうのまはり  
 に行つてゐると、有賀先生が早  
 る洗面していらつしやい。とおし  
 やつた。急いで洗面した。つめたい  
 水なので、氣持がよかつた。朝  
 食は、ごうのまはりでした。こ  
 れからあつちも特配にしやう。  
 とみんなでさうだんした。

ケクワン先生



で、ちくわん先生。ちくわん先生。と  
いってふざけてゐたので、御飯  
が、揃ひも揃つて、おそくなつた。  
午後日記を書いてゐると、迫水  
さんが、おひな様を持っていらし  
やうた。みんなはそちらの方をゆり  
かへつた。とてもおはいい豆びな様  
だ。少しすると、石田さんのお父様  
がさかんに降つてゐる雪が色をうつ  
していらした。すると、石田さん



も傘をさして出ていらつした。  
とてもおはいいかた。石田さんが、そ  
れを日記にじゃ生していらつした。  
た。とてもお上手だった。  
晩石田さんに、画帳を見せてい  
ただいた。さつきごうのまはりでお  
書きになった。私の懐もきの鉛筆画  
が書いてあった。



三月五日 月曜日  
 一時間目の修身の時間に「乗合  
 船」といふ所をお習ひした。高橋  
 さんがお読みになつた時、貝原  
 久平衛といふところを見、久  
 平衛とお読みになつたので、有賀先  
 生をはじめ、三四年の人みんな笑つ  
 た。とてもおかしくなつた。  
 國語の時間に、書取を返してい  
 た。百点の人は高橋さん



だけだった。私は九十四点だった。今  
 度こそがんばらなくてはならな  
 いと思つた。  
 体操の時間は、岩丸先生が、サ學  
 校にいらつして、インド昔話を讀  
 んで下さつた。一部三年の人も来た。  
 途中で、古川さんと、小林さんと、  
 橋本さんとでいらつした。それ  
 から又お話をうけつけていた。たいた。  
 ニつ讀んでいただくと、太き鳴った。

うきうきみそ



晩お風呂へはいるので、水を取  
 った。その時長ぐつの中に水を入  
 れてしまった。あとで見ると、そこ  
 の所だけ黒くなっているた。  
 浴衣の時は、着物におひのを

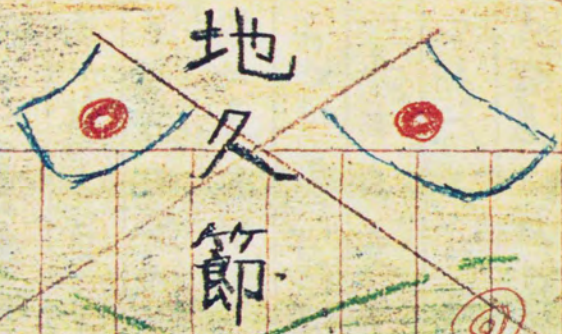
着て行った。  
 三月六日  
 おもしろい日記が出来た。

最後までつづきませう。

表紙のやうにかはいい繪やすなほ

な文を書いていこう。

三月六日火曜日



母の日

今日は、とてもお目出たけ地久節  
 だ。さうして母の日だ。ここではお  
 母様はいらっしゃらないので、先  
 生に「ごめんどうをおかけし  
 たり、ご心配をおかけしないやう  
 にしなければならぬ」と思った。  
 朝會の時に、地久節のお式があっ  
 た。それより、すんでから、三十分ぐ  
 らいおして、堀先生の七ざう物語

大人に知らせたのがえらいと言ふので、とてもほめられたといふのに、もう一つは、堀先生のおうちから二町ばかりはなれた所におさけいふが落ちてゐてそれを拾つたといふので大へほめられたといふ二つのお話だった。そのお話は又いつかのお楽しみといふので今日はそれで終つた。すんでからこの間からみつかうないおざぶとんをまぐの中へさがした行くと高橋さんが感想文を書いていりしやつた。とてもきれいな字だった。それに少し見とれてゐると、食事になつたので中學校へ歸つた。

お部屋にはいると、おなつと、ひしやくが、おの目をとらへた。片目のめへす人はだれだらうとすぐ思つた。すると、船垣さんと、野村さんがめいしにいらつした。その間もきつと先生方やすめはん隊の人たち、おは、さやかし困つていらつしやる事だらうと思ふ。となんだめをねがどきどきして自分までいんなことをしなくてもしかりれてゐるやうな気がした。私は食事になつてもいんなことはしないやうにし、~~もう~~と思つた。自分かそんなことをしたらきつと心にどがめ



られることだらう。と思った。  
 お晝御飯がすんで少ししつから  
 有賢先生が、お習字に丸をつけ  
 ていらつした。私は、つい日記を  
 ほつぱり投げて、それはめり見て  
 ぬた。古川さんは三年生の中では  
 一番上手だった。  
 さて今度は、四年生になった。  
 高島さんのはとてもお上手だ。  
 みんなで、扇といふ字もみんな

「丸も丸。と、水も丸。」といつてみんなながつ  
 いた。胸もあんなに上手にならうと思った。  
 又日記を書いてゐると、「ドーン・ドーン」と太  
 こが鳴った。「何んだらう何だらう。」と言つてゐ  
 ると、先生が、「班長さん行つていらつしやい。」とおつ  
 した。高島さんかいらつしやつてかへつていらつしや  
 ると、お餅のやうな細いものを持っていらつしや  
 った。「これ一人が半分づつです。」とおつしやると、  
 先生が分けてあげます。」とおつした。半分に切つ  
 て、それを長く延して輪にしたたり、三角にし

延



たりくるりくるりと二巻した  
のやいろいろう面白形になさつ  
たのでさんなで笑った。目だうが  
すんでおり又さんなで細くし  
ていただいた。七五三のあめみた  
い。とか「こんなになつたづらして  
も先生にむかうれない。先生もい  
たづらなさつたのだから。などと語  
合ひながらおいしくいただいた。  
先生が船たちのあはれで...きれい

なもやうあめのチョコキをあんていらっしや  
った。船は自分の物でもないので早くあ  
めるといいがなあと思つた。

自分で作つた物で手袋でさへもう水し  
いのチョコキがあめになつたらどんなにお  
喜びになるだらうと思つた。私も早く大き  
くなつてあのやうなチョコキやセーターをあめ  
たい。と思つた。



三月七日水曜日

ごあいさつの時外へした。今日  
めり、外でも勉強が出来るの  
だと思ふ。うれしくつたま  
うない。頭がすっきりしてお  
勉強がきつとはかぶるだらうと思  
た。お部屋のおさうじをしてゐ  
と、有賀先生が、道具を持って行  
きなさい。食器も。とおっしゃ  
床の間にある食器をたたみの



上におあらしになった。私もいっし  
よにおあらしした。本をきくと並べ、  
めはいいおひな様を中天に置いた。  
とてもきれになつて見あがべるほど  
だ。お部屋もきれになつたのでさ。ぼり  
した。いろいろのお持物を持ッてま  
学校の宿舎を出て、棚に本を置い  
た。今日から食事當番だ。早く洗面し  
てつけ始めた。

一時間目の國語の時、三年生が綴



方を書いてゐた。私はとても書きたく  
 ったまらなかつた。それは三日の発表  
 會のことや、始めのお米配給の  
 ことがあるからだ。どうしてか知  
 れないが、三年生の方ばかりむい  
 て國語の本には、少しも目がい  
 かない。ぼうとしてゐる間に國  
 語の時間がすんでしまつた。  
 理科の時間に、堀先生がいらつ  
 して、三年生の机の



所に行つて、梯形の面積の出し方をお  
 習ひした。それは、次のやうの答の出し方だ。  
 (一ノ四十一ノ四) × 四ノ二 = 二〇〇 と、いふやり  
 方だ。私はとても面白いので、そればかり  
 一心にした。はじめのうちはよくわからな  
 いので、頭の中が、むしゃくしゃしたがい  
 まいになちとさっきこうすれば出きため  
 にずのふばかりだと思つた。



三月八日木曜日

だんだん六年生と別れる日も近づいて来た。なんとなくきびしくなってくる。まあつまりないなあ。とばかり思っていたが、おふじんの中へつまらなかつてゐた。と、いつの間、時間かた、たのめ、起床になった。今日も早くしたくをしよ。あ、は、さ、さとした。あと何日で、野るのだらう。又、あつとんの中

で考へた事を思ひ出した。午前中は、まき運ばんだった。さ、藤先生が、お米屋さんの向かいの線ろを越えて、五六分位した所です。とおっしゃった。いよいよ出發だ。高島さんと並んで歩いた。りよう養所の前を通つて、竹やぶの所まで来ると、こまて来たのにつまらないなあと思つておると、弘田先生が、りよう舎の方へじよう報を聞きにいらした。どうがBさんですやうに。あ、一人でお祈りした。祈りがかなったのか、やはりBさんだった。

そこをまっすぐ行つて、村野さんのおうちへ  
行くはんだいの道へ行った。少し行くと防  
ご團の人たちが、メカホンを持つて大通に  
立っていらつした。「たいたいいびいきな  
りあつした。敵たちは、どこかのおうちの  
御門の所に、をりしけしせいになつてゐた。しは  
らくすると、B 29 B 29」といふ男の入た  
ちのお話が始つた。敵はどれだらうと、青い空  
を見渡した。どこにも見えない。又しばらく  
くすると、「たいたいいびいきよ。たいたいいびい  
きよ。」

と天人の声々がまはつていらつした。

「こくらうさま。」どうもありがとう。御さいま  
した。とあつしたのがへるに思つた。それ  
は、私たちが言ふはづなのにと思つた。めらだ  
やか、お米屋さんの前を通つて、ふみきり  
を渡つた。B 29 撃墜の所の道を通つて行  
つた。やつとまきのたくさん積んである所へ  
来た。三年生はたいいの人は一本持つて  
ゐる。やか、四年生の番になつた。有賀先生が  
私に下さる時、弘田先生が、柳野さん「これ」

積む



とおっしゃって、三本となはづく  
 っであるまきを下さった。ぬは、弘田  
 先生がまた私の名前をよくおぼへ  
 ていらっしやるなあ。と思った。  
 岩田さんのせおひ方のまねをし  
 して、つるると、弘田先生が、  
 「柳野」さんはうまいやり方をし  
 てゐるね。とおっしゃりながら、  
 なはをし、かりと結んで下さった。  
 「どうもありがたうございました。」

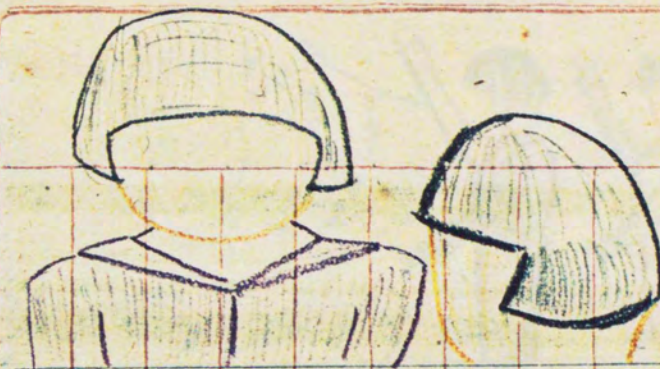
それから、心の中で、何ども何どもありが  
 たうございました。ありがたうございまし  
 た。とお禮を言つた。

それから、お礼をしまして、休みなご疎開學  
 園にむかつた。今日はいつもよりづつと  
 めるかつた。まきを置くと、なんだから、胸  
 がへんなになつたやうに思はれた。

どうもごんごうさま

之でおい、い、ごはんがたけすよ。

三月九日 金曜日



午後六時、六年生が、八千の万に、  
お禮まはりにいらした。もう明日で  
六年生とも別れなくてはならない  
と思ふと、悲しくて悲しくてたま  
らない。日記を書きながら、六  
生ずぬ分おれいね。などとう  
わさをしてゐると六年生が歸っ  
ていらした。「うわさをすね  
ば、かげやそり、みんながいた。

少しすると、太こが帰った。たい園式だ。  
六年生とも別れたい。い、う、悲しさが  
こみあげて来た。お武がすんでめり机  
をずらりと並べ、楽しい夕食をい  
ただいた。お赤飯におたくわん。それに  
さけくわんとともに、もう大ごちさうだ。  
六年生にたいしては、最後の夕飯だ。  
一しよに目たうをしていただいた。御  
飯の時、「これで少し口へらなかつた。と  
いつみんなに笑はれた。



三月十日土曜日

とうとう六年生と別れる日が来  
た。つまりなすてたまりない。

朝會の前には日なたぼっこをして  
ぬるりと六年生が荷物をおたづけ  
ていらした。いよいよ朝會に  
なった。三星年と、六年に別れて  
最後のお別れした。さやうなら、さ  
やうなら。私たちはだんだん見え  
なくなると六年生に大聲で言った。



岩丸先生が愛國行進曲を歌へ。と  
おしるた。私たちは悲い中でも一  
生懸命に歌った。きつとこの心をこめ  
て歌ったので、六年生も聞えたのだら  
う。朝會がすんでから、午前中は六  
掃除だった。お荷物をきちんと整と  
んしてあり、跡にたぎを拾ひに行った。  
シリカル將軍とか、ミリガン婦人  
とか、ルミ。とて言うてさわいた。有賀  
先生のことを、ピタリスおっさん。と言

って、船村さんのことを「ア、ア」と言った。  
二回目は、私がいろいろききを持ってゐたので、先生  
が「松ぼ、くりがかりになりなさい」とおっしゃ  
った。私は「松ぼ、くりや、松ぼ、くりや」と言  
って林の中を歩き廻った。  
午後からは、ずっと自習だった。

三月十一日日曜日

今日はうれしい西暦日だ。朝御飯がすむか  
うまな時、高橋さんのお父様が急いでいら  
っしゃった。それからうしろするや、萩山の方か

ら男の方がいらした。私は思はず、「あ、男  
の人。」と言ってしまった。だんだんこちらへ近づ  
いていって、しやると船村さんのお母様だったの  
で、私はびっくりした。きき言った男、といふこと  
はか開えたかしら、私は「あ、あんなことをい  
はなければよかった。」と思った。

洗ひから歸って来てから、高橋さんの食器を  
きれいにのいた。みんなが「つもけんめ」をす  
る二人が今日ははんだいた。いふこと  
をいはれてしまった。ほんとにさうだ。それから

三月十二日月曜日

朝會の時あとで、片山先生がおいすの  
事でお話があった。さうして入口もきめ  
ていただいた。正面の一番はじだった。  
おいすは五きやくで、一列に並べた。私は一  
番後から、二番目だった。こんな後へ来  
たことはないの。何だかへんな気がした。  
圖立の時刻にジャバラの研究をした。と  
うとうせいかうした。とやもうれしかった。  
それから表紙をはった。



時間がすんでめり机をこころから運ん  
で外で日記を書いた。お夕食も外でい  
たいた。

女學校の宿舍に歸つてから、  
おふとんを取りこんだ。  
はき物もきちんと並べて整頓し  
た。

夜の繪

三月十三日火曜日



一時同目の國語の時間に水  
族館といふ所をお習ひした。  
「たぬ足がに」といふはな。が  
ある事がわかった。面白い物も  
あるものだと思つた。  
二時間目の算數で山口先生が  
村野さんのおうちにいらつしや  
たので、自習だった。何とな  
算數に氣がまぬなかつた。

「ああずの分長い時間だなあ、早く太こが鳴  
りないかな」と思つてゐると、あんの上太こが  
鳴り出した。私は、急にうれしくなつた。  
晩女學校に歸つてから、小さな紙に「疎開學  
園」といふだいな、一番頭にびんとひびく物を  
書いた。私は、「ブタニク」と書いたのですぐみん  
なにわかつてしまった。「こんなことは、書かなけれ  
ばよかった」と後悔した。とてもおもしろかつた。  
明日もしたいと思つた。



三月十四日水  
 一時間目は、國語の時間でした。  
 たが一部四年が、おふ名當番な  
 ので、半學級に行き、おふ葉や  
 船木を運んだりました。水も汲  
 んだ。手につめた水をかけて、  
 のままにして、おふも少しもつめ  
 たくなすてかへって、氣持がよ  
 かった。六人の方が、算數をして  
 いる時、お風呂に行きました。

23.7キロ



とても氣もちがよかったです。  
 午後から、水うえう所へ泳ぎ  
 ました。きつと一部四年  
 の人は、みんなふえてゐるだらう  
 と思った。あんの上、08、ふえた。と  
 てもうれしくなりました。  
 船垣さんをおひこしたの、でう  
 れしかったです。もっと、ふえて、リッ  
 ぱなかりだを作り、早くおやにな  
 るうと思った。



三月二十五日水曜日

ごあいさつの時に、ごとうさんが、お父様お母様お早うございます。とおっしゃった時、きょと、朝みりイレンがなり出した。きょと、朝みり来るのだから、機さい機たう。と思った。空服さうをして、ごとうのまはりに行つて、先生がいつなんとおっしゃるお、耳をすました。食事が終つた。

菅村先生が、**敬告**戒告報は、解餘になりませんが、解餘の時と同じやうに、授業をします。とおっしゃった。朝會がすんでから、ごとうが、椅子をぬし机も出して、ごとうのまはりになつた。一時間目は、算数をした。二時・間目もした。先生が、三年生の方に行つて、教へていらつしやる時おしや、やりをしてゐたので、山口先生に、息のみなに、洗濯といはれつじまつた。それがすんでから、山口先生が厚紙を取りに行つていらつしやる間に、必勝歌や軍旗の合唱をして、すごい洗濯をしてしまつた。

時間が終った。六人の方たちね。二月のらうや、百ふら  
 んのぼきん。どおしったので、船あめうちは何が何  
 やらさうばりわからなめったが、ふとさきききわいた  
 ことを思い出してすづめられた。  
 「ああ、あんなことをしなければよかった。」と後悔し  
 た。國語の時間に、二部四年の中村さんかお書きに  
 なったあぶらつばの水族館の箱を見せていただいた  
 た。とてもお上手だった。これは、三年生の時におか  
 きになったさうだ。

・三月十六日 金曜日



今日は宿舎かうたいの日だ。うれしい  
 やうなうまらないうやうな気がする。  
 朝會がすんでから、すぐ女學校へ  
 行って、おふとんを包んだ。私は、お  
 んに持って行って、ただくやうに森  
 先生が、きめて下さった。私の持つて行  
 く荷物もまとめた。いよいよ出發だ。  
 荷物を持つて、女學校を出た。  
 れうえう所の前まで行くと、荷

物がへんなになつてしまつた。れうえう所の芝ふの所  
で、荷物をきちんとした。高田先生が、私のルッ  
クシャツを持つて下さつた。やうと村野さんの  
おうちへついた。今晚から、こゝで眠るのかと思  
ふと、うそのやうだ。きふな階段をのぼつて、ふと  
んで一ぱいになつてゐる二階へ来た。荷物を置  
くと、急にうれしさがこみあげて来た。  
荷物を片側によつて、有賀先生や、森先生がき  
れいにはいついらしやつた。本部と同じたたみ  
なのでびっすりした。

圖師さんこゝろよく、一どんもて来ないと言つ  
て階段をおりてはきものをきかへた。

それから、おしして先生が、下駄箱をきめて下さ  
つた。私の所は、わりあひ下の方だ。

午後から、又、荷物を持つて村野さんのおうちに行  
つた。晚ライスカレーだった。さうして、あまりあ  
はれて、野村さんのおねんの中に、私のおねんを  
ちんばつさせてしまひ、巾着もハンケチもまう黄  
色にしてしまつた。おめしいうなへんな気が  
した。  
**コレコレ、おがいは、はい、おせん**

朝會がうんでめいずぐ永の葉  
集めをした。高島さんと、八百谷  
さんと、三人でした。私が永の葉を  
置きに行つて歸つて來ると、だれも  
いません。あたりを見ると土手にあ  
たりから、高島さんの葉が見えた。  
あれかと思つて行くと、かくれておたの  
よ。とあった。



八百谷 さんが置きにいらつしやうた時、三部四年の影  
にゐる。これゐると、こちらの方を見て、もめめらない  
らしく、ちがふ方にいらつしやうのであかし、ふき  
出して、もめた。ふしして、ちやうと、敵たちの所にいら  
つしやうたので、もうおかしな事、してしまつた。  
たいひ にも少しなり、ぬかつてゐる所にも、いりて、  
大戦果 をあげた。午後は、休養だつた。

三月十八日 曜日

今日は山崎さんかいらしや  
なと思ふとうれしく  
つたまいない。朝會の  
前に高島さんに家



なき兄の續きを讀んでいただ  
いた。朝會がすんでから、日向に  
椅子を背けて行つて、日記をか  
いた。繪もぬいて見てもたまりな  
くなった。それから高島さんにお  
めりしたまん、画の本をよんでお  
ると、眞事當番になつたので  
すぐ飛んで行つた。とてゝ大  
ごちさうなつた。考へて見る

と、五年生の面會日だ。御飯がすむやいな  
や、警報になつてしまつた。せうからお洗  
濯が出来ると思つたのに、つまらないなあと  
思つた。たいひするとき、みんなで、汽車ご  
こをした。解~~解~~解になつてから、急いでお洗濯  
をした。机の所へハンケチを取りに来た時、  
山崎さんらしい姿が見えた。飛んで行つて、  
みんなに知らせた。あの上へはほんたう  
だつた。でも又十人になるのかと思ふと、つ  
まらなくなつてしまつた。



三月十九日月曜日  
朝こころへ来て、小黒坂を見  
ると「園舎大掃除」と書いてあ  
った。朝會がすんでから、先生に  
マスクをみんなにわたした。あは  
白いマスクを持ってゐるので、使はな  
かった。靴を持って、量の方へ行った。  
竹の障子にははき巻いて、靴で島  
と道のくづつをつけた。  
休けいの時、たまたまの讀んである

ところ	を見る	と、石田先生がのん氣に腰掛けて歌
を歌	ついたら、しやうた。	みんなで明日の日記の繪
にみ	など、とこゝろで話した。	有賀先生も「明
日の日	記にあみきなさい」とおっしゃった。	こんなこと
は、石田	先生はちっともお知りにならなかつた。	たうらう
と思	たら、いつかうあしうなつた。	
三月二十日火曜日		
御飯	がすんでから、すぐ女學校へ行つてすぐ	
落葉	や、枯木を運んだ。朝會の途中で警報	
になつ	た。解餘になつてから、太た順にお風呂に	

はいた。八重谷さんとすぐ食事當番へ行った。  
高島さん、柳野さん先生の所へ行ってお聞き  
して、来てよ。とおっしゃったので、行くと先生に  
「御飯つていた。いただきます。」と言ふと、「今は代  
用品ですよ。ペンペケペン。ですよとおっしゃ  
ったのでおかしかったです。  
午後から、國語をしてゐると、荷子を持た  
ないで待ひとおっしゃった。又すぐおかしな  
二十ニから、二十四までずっと讀んだ。お習字の  
時間に、宮城前旗の波といふところを、

二度練習して白い紙にお清書し  
た。

三月二十一日水曜日

彼岸

今日は、お彼岸のお中日だ。朝方お  
手洗に行くとき、お隣のさんのおうち  
の方が二人で、お餅をついていらつし  
やうた。さういへば、日中と夜とが  
同じ日で、これからだんだん日  
中が長くなるのだ。  
昨日のつづきの平行四辺形を作る

のをし  
 た。岩田さんが出来たの  
 であつた。早く出さな  
 いかなあ。と思ふと、  
 気が  
 いらぬ。朝  
 會がすんでから、又  
 すぐそれに取り  
 いかつた。すぐ出来た。  
 お赤飯お赤飯。と  
 いひながら、教官室の  
 方へ走つて行つた。そ  
 の時  
 は何  
 かつた。  
 午後  
 から  
 洗  
 した。  
 途中  
 で  
 警  
 報  
 になつた。

三月二十二日 木曜日

朝會のあとで、岩丸先生に、疏黄

島玉さんのお話を聞きました。

栗林中尉を始め、三万三千人の

勇士の方々のめいめいをお祈り

して目とうをした。私たちは先

生のおいひつけをよるまもり、もつと

もつときりうとしなすてはならな

い。みんなのいやなことを自分か

うすすんでしなければならな



一 と思った。それより、すぐ、鋏や、スコップを持っ  
て、畠に行き、掘りかへしをした。私は始めの  
うち、鋏で掘りかへしスコップで土を掘った。さう  
して鋏もスコップも使はない人は土をほぐし  
た。手が鼻黒になつてしまつた。  
あとで手入をし、しまつて、戻つてから、圖師を  
んと二人で手や、足を洗つた。とても氣持が、  
よかつた。午後からは、自習だつた。

三月二十三日 金曜日

今日は終業式だ。今度からもう五年生に

なるのめと思ふと、うそのやうだ。

終業式がすんで、あら、菅村先生のお別れ  
のあ式をした。私はゆめにもそんなことを  
知らないのびびりした。たうして、あらめ  
になるのだらうと思ふと、ゆしぎでたまらない。  
お話會の時に、海底萬里のやうな勇しい歌を  
教へて下さつた先生が、あやめになるなうで、まうた  
くうそのやうだ。私はいつか、先生の教へをよ  
く守つてもつともつと、りばな人にならうと決  
めた。お晝は、大ごち走で、さけくやんや、あたえ

B29

あゝがあった。これはきっと、先生が、お  
やめになつたからだらうと思つた。**うん**  
午後ふらふら、少し日記を書いたり、あみ物  
をしてゐると、水道の方の道めうどな  
たかいらうしやつた。そばにいらうしやつた  
時よく見ると、大澤さんだ、たの  
でびくくりした。それこそのはづと  
つぜんだつたからうた。みんな顔を  
真赤にして、笑つてゐる。私はどうし  
たのふ、目から涙が出て来る。私は



いの  
しまつ  
さんが  
て見送  
まうな  
夜し  
元氣な  
の人が  
ッしや  
をふつ

「私たうして泣いたの。」とみんなに聞きて  
しまつた。富仕事かすんでみう、少したつて、船村  
さんがおめへりになつた。私たちは、見えなかつた  
て見送つた。もう二度と見られなかつたかと思ふとつ  
まうなふてたまうない。**うれー涙でせう**  
夜しうしん用意になる時お手洗に行くと  
元氣な歌聲が聞えた。行つて見ると、三郎六郎  
の人が菅村先生を取り巻いて、ずつと向かいへいら  
るどころだつた。サヨナラサヨナラ。手  
てお送りした。

朝會の時お衆運びの用意をも大並ん



午後から、自由で、紙ぼさみを作った。先生死、おめへりになったりお見せしようと思ふと、うれしくなった。

歸つて來ると



品物  
傷者

ツツア  
イイア  
アア



三月二十五日 曜日。  
 今日ばまき運び作業だ。B29のぜん  
 かいよりも遠いさうだ。ためら、い  
 つものやうに、もう一本下さいなと  
 言はな、で、先生が疲れて下さった  
 のを、ここまですと持てこやうと  
 思った。いよいよ出發だ。少し風は  
 強いが警報が出ない。幸ひだった。  
 B29のよくがどこに、あるかと思ひ  
 ながら、島道を、その置りてあ

る所へある所へと急いだ。思ったより、ずとち  
 かいのでびっくりした。四本いた、だ、い、と、ま、を、た、  
 途中の道がなんとな、短く思へた。大きな石  
 の積んである所で、せをひなほした。園舎に着  
 ると、船垣さんがおめへりなさい。とあ、し、や、う、つ、た。  
 その時、何気なく、うれしくなつてしまつた。  
 斗崎さんは、豆が、出、き、て、足が痛いのにあ、し、ま、ひ、ま、  
 でかんばつて持つていら、し、た、た、ので、感、心、し、た、  
 同じ位に疎開した大澤さんが頭が痛、つ、や、依  
 るもので、はず、つ、と、ち、か、い、と、思、つ、た、

今日ばかんばつたね

三月二十六日月曜

お食事がすんでから、輪投げをした。一度目にはいつ、二度目にはいつ、三度目に三つはいつ。すると、お風呂ですよ、と神尾先生がおいしかった。すぐ行って、水汲みをした。しばらくくまると、高橋さんと、船垣さんのお母様がいらした。私は又そんな疎開をなさるのかねと思ふところだった。



やはりさうだった。船垣さんの外たうをさがした。お玄関の所の所にかかっていた。それを待って行って、お別れをした。それからすぐお風呂へはいった。湯船の中より最後のお別れをした。もう八人かと思ふと、つまらなくなつてしまった。でも仲よくすれば、少くともたのしみなる物だと思つた。

三月二十七日 検

おもしろい 柳野さん日記



三月二十七日火曜日  
 今日も又まき運びだ。おととひ  
 の半分位たさうだ。近いのだろ  
 う、おととひよりも、もっと持たろ  
 と思った。朝會の前に、高島さん  
 や、山崎さん、のなはとびのおま  
 はしをした。  
 朝會がすんでいよいよ出発だ。  
 なはを持って、行ってまねります。  
 とい、門をおた。  
 敬

ひさし  
 ぶりに分  
 顧の前の  
 アスバ  
 ルトの大  
 通  
 りを通  
 った。お  
 米屋さん  
 よりは少  
 も遠いが  
 B27のざ  
 んがやの  
 所よりも  
 ずっと近  
 い。  
 をちさん  
 にきちん  
 としよは  
 せていた  
 だいた。  
 先生がお  
 っしゃ、  
 った通り  
 に、ゆっ  
 くり、休  
 まないで  
 やつと疎  
 開學園に  
 たどり着  
 いた。三  
 部五、六  
 年の方  
 があへぎ  
 ながら、  
 すみを運  
 んでいら  
 った。  
 顔を赤、  
 たのでさ  
 っぱりし  
 た。

三月二十八日火曜日  
 今日朝めり、島の増産作業だ。うねを作って

粥

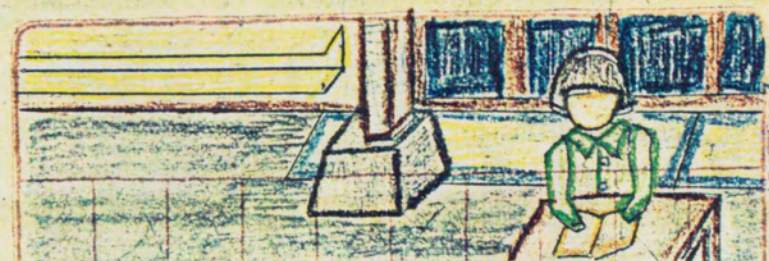
た取芽を入れた。だいたいは運びをした。どう  
ぞ今年も大きなのがつきますように。と心の中  
でお祈りした。男の子もいひを運ぶのをいやが  
つた。かみで、これでは、御歌にあつておないなあと  
思つた。やうとこさで作業が終つた。お晝は、あか  
湯だった。三年生があまり小食なのでびくつき  
した。でも来たばかりだから仕方ないと思つた。  
午後めう、日記を書いたり、あみ物をした。  
晩宿舎へかへつてから、くつ下カバーを作り  
あげた。うれしいので、セーターはいた。



作ったばかりなのに、手あめで黒くしたのでつ  
まうなくなつてしまつた。これは宿舎へかへつて  
から、はこうと思つた。

三月二十九日水曜日

今日は、作業なしの日だ。朝會がすんで  
めうすぐお晝にもどらないで、ゴムなわ  
をした。先生もおはいりになつたので、でも  
面白かつた。夕しぐらゐは、飛べなくなつ  
てゐるだらうと思つてゐると、かへつて  
飛べるのでうれしがつた。



それからいって、山口先生や、有賀先生のいうしやる、前廊下に来て日記を書いた。ヘリムつばめり言って、仲々日記がはかどらない。やうと日記がかけた。その頃、山口先生が、三四年生をつれて、さなほにいらした。私も一しょに行きたくなつてしまった。さうして先生に見ていただいた。三重丸がついたので、今度も又一生懸命に書かうと思った。

午後からお部屋にはいって、オルガンや、トランプや、かるたをして遊んだ。私たちはこんな遊びに、お勉強の出るのの、兵隊さんのためだと思った。三月三十日 金曜日  
今日は、まき運搬も、火運びも、畠仕事もない。朝食をすんで、八百里谷さんが先かに行つて、いらいと、さういふ。サイレンが鳴り出した。私たちは、すぐ防空壕に潜り込んだ。一度も待ひしないで、解散になった。それから、山崎さん一しょに、日記を書いた。

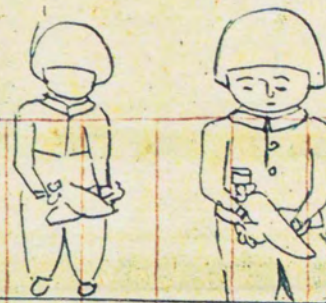


午後から日記を書いて、くっ下カバー  
のかざり玉を作った。八百合さん、  
岩田さんと、マリつきをした。途中で阿  
部先生が、歸っていらした。お歸  
りあそばせ。と言ふと、先生は、ちっ  
も遊んでおなによ。とおっしゃった。井  
戸ばたの方から、「こちは」と高木さん  
が言った。私たちは、「こちは」だ。と  
いって笑った。

三月三十一日土曜日

今日で、三月も終った。今月は、ど  
んなくらしをしただろうと、考へ  
た。えんこ疎開になさった方、あとも  
いらした。方などのことを思ひ出し  
た。承月も又し、くらしやうと思つた。  
朝會がすんで、みう、高任事の用意  
をして、スコップや、鍬や、いしよくこ  
き持って、島と道との分別をした。今  
日は何となく、この仕事に気がむか





ない。ぼやぼやしてゐる間に、作業  
終になつてしまつた。スコップの土きれい  
に落してかたづけけた。手も洗つてお肌  
もどつた。

午後から、村野さんのおうちの裏の  
畠にお大根をいただきに行つた。二本  
めついで歸つて来た。

# 4 月



さい疎開

私たちは、

廿日ぐん

家へ歸つて、

荷作りするふな。

今日から四月だ。今年は、季節が早く、梅の花がまだ咲いてゐるが、もうたしかに四月です。六年生とお別れして、もう一月もたったと思ふとふしぎでたまうない。ほかの組のみんなが、今日かへる。とから今日みんなのお母様がいらつしやる。と言つてゐるので、待どほしくてたまうない。朝會になった。きつと

かうちへかへるお話があるだらうと思つてゐるとなつた。この朝會の体積も、ここでは、最後だらうと思つて一生懸命にした。岩丸先生が、今日は、みんなの目玉が光つてゐる。とおっしゃつた。すんでから、日記を書いてゐると、堀先生と、片山先生がいらつした。集合。紙は、まっしぐらに飛んで行った。今度こそ、さい球開のことだらうと思つてゐると、あんなにさだつたので、もうこれしかつた。お話の途中にも、お母様はまだめたと垣根の方を白いてゐたので

少ししめお話が耳にはいりなかつた。  
お話がすんで少しするに坂屋さんのお母様と  
おのお母様がいらつしやうたので、とてもうれし  
かつた。坂屋さんに二人で、門の方へ行つて、お母  
様戸をおつれして、お机の所に来た。  
お母様にいさしぶりに會つたので、なんとな  
く、はづかしやうな氣がした。お通、知表のことや  
あみものことをいろいろとおはなした。  
神尾先生が、一昨五年お風呂にいらつしやう  
とあつた。来たじゆんだにあつしやうたので、

一番にならうと思つて、おるうちにみん  
なに、おひこされて、びりになつてしまつた。  
お晝御飯は、白米だつた。とてももちもちし  
てあつた。御飯がすんで、荷物を求めて、  
村野さんのうちへ行き、おふしんや衣類をまとめて、  
大づうしきにつつんで家へ入つた。お母様は  
まだかへつていらつしやうなかつた。おぢいさんだめ  
に、しやうじ影にゐられた。とても面白かつた。  
夕飯は、おはりご飯だつた。

四月二日

今日から自分のうちの生活だ。  
明日荷作りするので、色々の  
ものをそろへた。お母様も、叔  
のもんぺをぬいていらした。

お晝の御飯前に、<sup>お晝に</sup>名刺を書いた。  
お庭の枯木や、枯葉を集め  
て、それをもやして、こやしを  
作った。あまりけむいので、スキ  
ー目金をはめてした。ちうとも

けむくなかった。

午後から、ひさしぶりに田どアノをひ  
いたが、冷まであまりひかなかったりで、すつめり  
下手になつてしまった。

晩にとこのお兄様がいらした。

四月三日

今日はいよいよ、村野さんのうちへ行っ  
て、荷作りをする日だ。朝目をさますと、  
お母様が一生懸命に、もんぺをぬいてい  
らっしゃった。お母様が、叔のためには、こんな

早く起き「や」って下さるのに、ね  
ぼうをしても、申しわけない。と  
思つて、時計を見ると、六時前  
だった。すぐ起きて顔を洗つた。  
朝食がすんでから、すぎ、  
荷物に取りかゝつた。洋服に  
アイロンをかけたりしてゐる  
と、いつのまにやら、十時になつて  
しまった。すぐくつをはいて、寂  
寞へと向つた。

電車に乗ると、すぐいこんで、すぐに頭  
が痛くなつてしまった。

国立についで、やうとほつとしたと思ふと、又  
電車がこんで、駅名など見えな  
い。解のまはりは、ただ、大きな人  
たちばかりだ。やうと、村野さん  
のうちへついた。ひと仕事  
して、あつた。すんでから、いとこ  
のお兄様に、八百谷さんにおか  
りした自転車、うしろにのせて  
いた。だいて、園舎に、たくあん  
や、お米を、

いただきに行つた、有賀先生におあひした  
時、なんとなくほづかしめつた。